

山口県の地質物語 - 1 : 地質とは

まず、身近にある県内の風景写真から見てみよう。図1には、木でおおわれた山々と、稲や野菜がつくられている広い畑、畑には泥や砂なども見えるし、山裾には家並みもある。図2には、ごつごつとした硬そうな岩石と海の水が目につく。また図3では、中学生くらいの女の子が層をなしている岩石を見ている。

このように、地表には動物、植物、岩石、泥や砂、水および人工物がある。しかし、表面をはぎ取ると、その下は硬い岩石だけになる。これは山口県だけではなく、世界のどこでも同じであり、地球自身の大きな特徴といえる。言い換えれば、硬い岩石が地球の本質的な構成物なのである。

これから使う言葉の意味を、最初に簡単にまとめておこう。大地とは、広くて大きな土地、あるいは地面をさす。岩石は、鉱物またはそれに準ずる天然物質の集合した塊をいい、火成岩、堆積岩および変成岩に分けられる。地層とは、層をなす岩石（図3）と未固結の堆積物（泥や砂など：図1）を合わせたものをいう。そして地質は、地表付近（地殻）の岩石と地層の性質、種類、構造、沿革などを包括する意味として、使われている。

地質に関する学問の基礎は、18世紀後半にヨーロッパで確立され、英語で geology (geo : 地球, -logy : …の学問, の意) と呼ばれた。日本では、江戸時代末期（19世紀前半）に蘭学者が地質学と訳した、といわれている。なお、このシリーズでは『山口県の岩石図鑑, 1991』の写真を引用するので、本文も参照していただきたい。（文責：西村祐二郎）



図1 山口市阿東町徳佐上における青野山火山群の溶岩円頂丘

(図1~3 : 山口県の岩石図鑑)



図2 長門市青海島の石柱群



図3 美祿市大嶺町の砂岩・頁岩互層